

神奈川県病院協会会報

特集 法人設立30周年に思う



第 34 号
2004. 2. 25

も く じ

卷 頭 言	雑感	富 田 恭 弘	3
特集	設立30周年に思う		
	法人設立30周年を迎えて	土 屋 章	4
	法人設立30周年に思う	松 島 善 視	6
	法人設立30周年を祝して（思い出の一コマ）		
		太 田 正 治	8
	法人設立30周年の感謝と期待	益 田 啓 作	12
	設立30周年に思う	大 友 定 雄	14
	法人設立30周年に思う	青 木 政 雄	17
論 説	効果的な医療情報システムと電子カルテの導入について ～経営面と医療面からのBPR～		
		高 木 諭 介	19
寄 稿	最近気になること	渡 邊 史 朗	42
	パソコン時代	行 山 康	44
	湯河原自慢	伊 藤 幸 治	47
	StadtplanとPerspektivitat	岩 井 一 正	49
	学会奮闘記～バルセロナ紀行～	加 賀 屋 善 教	51
	タレントドクターMさんに聴く	小 副 川 英 男	53
新入会員病院紹介	聖隷横浜病院		56
かながわ散歩	よこすか散歩		59
各年度の主な事業			64
資 料 編	会員数の動き		71
	歴代役員名簿		72
編 集 後 記			79

— 表紙写真 —

どこまでも広く明るい紺碧の空、カモメがとび、黒い軍艦鳥が舞う。

コバルトグリーンに、ブルーに波頭が銀色に輝く深く澄んだ海。

タヒチの海でした。

（撮影地：タヒチ島

撮影者：渕野辺総合病院

理事長 土屋 章）

巻頭言

雑 感



社団法人神奈川県病院協会

副会長 富田 恭弘

(青葉台病院病院長)

10月に、右目の白内障（人工水晶体）の手術をした。夏頃から視力が弱ってきたので、思い切って決心したのである。

20年前、友人が同じ手術をした時は、たしか2週間程入院していたと思うが、最近では日帰り可能である。

医療の進歩は、文字どおり日進月歩である。学生時代、人工肉筋の講義をきいたが、当時は、日本でも数える位の大学でしか行われていなかった。現在は、整形外科と名のれば、行われなかったところはないだろう。最近では、腹腔鏡による手術の事故例が、いくつかマスコミの話題になっている。術中の例はいたし方ないとして、術後何ヶ月も経った例まで、組上にのぼっているのは、証明のしようがない。家内も、胆石で御世話になった。入院日数も少なく、創も小さいので、大変ありがたかった。新しい治療法は、このような利点があり、改良もされていくので、更に盛んになると思う。

症例が増えるにつれ、充分経験を積まない術者が、現れる可能性もある。経験を積むということは、技術ばかりでなく、早めに事態を察して、次の手段に移る決断が出来るということである。

最近の情報量は、膨大であり、専門職としてそれらを消化していくのは、大変な努力を要求される。しかし、まがいなりに、人命をあずかる以上、充分対応していかなければならない。

今日確立されている治療法も先人の血の滲む努力の結果であることを思うと、マスコミの一方的な取り扱いが、新進医療の抑制にならぬように期待したい。実はこの問題は、もっと論じたいのだが、目の手術の後なので、今回は、ここでとどめる。

法人設立30周年を迎えて



社団法人神奈川県病院協会

会長 土屋 章

(湖野辺総合病院理事長)

25周年記念式典を多数の来賓をお迎えして挙行了のが、遂この間のような気がいたします。25周年記念特集号を読みなおしましたが、大変良くできています。法人化以降の歴史がお蔭様で残りました。30周年になりましたが、現在の社会情勢、経済状況等を考え式典は見送りといったしましたので、25周年以降の事業等を振り返ってみたいと思います。

御承知のように事務長部会の皆様は大活躍をし、県病事業に大変な貢献をしてくださっております。然し、事務長職は日の目をみる事が少なく、何時も縁の下の力持ちの役目に終わって来ました。そこで少なくとも県レベルの表彰をと考え県にお願い致しました結果、「神奈川県保健衛生知事表彰」を県病から推薦することを御承諾いただきました。その前段階として平成11年より当協会としての事務長表彰を開始いたしました。

今は、次々に起る医療事故が新聞紙上を賑やかし、社会問題化しております。この対応に力を入れるべく、県当局の応援を仰ぎ、医療事故防止対策のための研修会を開始し、ここ数年の重要な行事の一つといたしました。医療安全対策は医療監視は勿論、機能評価においても重要ポイントとなり、事故防止を各病院が全力で取り組んでいるところであります。

一方、情報化時代の流れに伴い、インターネットによる情報提供の委員会活動が始まったのも平成13年度からでした。

又この間、再々にわたる医療法や社会保険診療報酬の改定があり益々複雑化する中で、社保委員会の御骨折により医事研究会も回数を重ねました。

又、病診連携の実を上げるべく、県医師会、看護協会との三者による定例の連絡会、病々連携や研修医問題に取り組むべく四大学医学部及び七大学附属病院と

の懇談会、関連団体による医療関係団体連絡協議会等を開催し、今後とも県病としての役目を果してまいります。

医療施設経営改善支援事業も申すまでもなく重要事業であり、心して取り組む必要があります。

県病としての重要課題は山積しておりますが、会員皆様のご後援を期待しつつ、又皆様のお声に充分耳を傾けながら頑張ってお参りたいと考えています。

明年7月2日（金）、3日（土）は御承知の第54回日本病院学会がみなとみらいのパシフィコ横浜で開催されます。現在各委員会で準備のため大変な御努力をしてくださっています。

御後援は勿論、神奈川県での学会成功のため、是非とも各病院からの多くの演題発表や多数の参加をお願い申し上げます。

（本稿は、平成15年11月に寄稿されたものです。）

法人設立30周年に思う



社団法人神奈川県病院協会

監事 松島善視

(松島病院理事長)

30年の間、定款第3条目的達成のため、各種事業を大過なく実施し業績を残して来たことは「会長をはじめ役員各位の御努力と会員の皆様の御協力と御理解の賜に他ならない」と存じます。

しかし、省みていたらなかった事は、政界（県議会）に対する政治連盟の活動であったのではないかと思われます。

毎年、当会の政治連盟として与党と野党第1党に対し要望書を提出し、その説明の機会を得て、役員数名が陳情の型で対応したのであるが、これは年1回のセレモニー的な存在であって、吾々の要望に対しての各党からの回答もなく又、行政施策の中に反映されたものがほとんど見当らなかったのは政治連盟の力不足もあるが、政界・行政の認識が我々民間人との認識の相違にあるものと理解せざるを得なかった。然しこれからは政、行に対し強いインパクトを与える活動が必要と思えるようになった。今回の坪井会長の所信表明に同様の思いを感じました。

坪井会長が次期会長選不出馬を正式表明

— 日医臨時代議員会 —

日本医師会の坪井栄孝会長は、10月12日開催された日本医師会臨時代議員会の冒頭の所信表明で、来年4月に予定されている次期日医会長選へ出馬しないと正式に表明した。坪井会長は、社会保障を国家戦略に据える基本理念を改めて強調。国民合意の下での、政治と行政の説得を日医の最大の責務と位置付けた。その上で「この重大な難事業の完遂には、強烈な情熱と大局観が必要であり、また、会長としての優れた指導力と会員全員の強固な団結力が不可欠だ」と指摘。「この局面に立ち、自己の限界を悟る時、次期会長選には立候補しないことを決意した」と述べた。任期を半年残したこの時期の退任表明は、極めて異例。

(表明の中のアンダーラインのある場所)

この表明の中にある様に政治と行政への説得は容易でなく、坪井会長の御苦労は大変であったが、思う様な結果が出なかったと想像されます。

私達は強固な団結で、政治と行政に理解を求めて行かなければなりません、政・行・民の力関係を均衡化するようになるのは、我が国の体制下では難しいかと考えられます。

又衆議院総選挙に遭遇したので、政党のあり方について知ることが出来ました。

今回の選挙はマニフェスト選挙と呼ばれるが、医療に係わる事項に絞って検討したが、やはり政治的公約と国民的立場になると自民党の抜本改革の方向でははっきり判らない点があり、民主党の政治政策の出し方が判り良い様にも見えた。

さて選挙が終わって自民党は第二与党の公明党との連携で安定勢力を維持出来たが、党内事情は必ずしも一本ではない。

民主党は議席を大きく伸ばしたとはいえ、2大政党としての足がかりがしっかり出来たのであろうか疑問が残る。

小泉改革は宣言通り100%実施は出来ないにしても、半端ですませる訳にはいかない。

政治家は私利私欲を捨て、自民党でも民主党でも真に国民の健康を守る医療を考えてもらいたいものです。



法人設立30周年を祝して (思い出の一コマ)

社団法人神奈川県病院協会

理事 太田 正 治

(太田総合病院理事長)

先ずは法人取得30周年おめでとうございます。

思い起こせばこの法人化の年は、私にとっては何かと思い出深い記念すべき年でありました。

第1が、副院長として太田総合病院に就任した年であり、そして病院経営の何たるかを勉強するために、この年昭和48年6月～7月にかけて約1ヶ月間、世界病院管理専門調査団の一員(父の名代)として参加し、第18回国際病院会議への出席を皮切りに、米国とヨーロッパを、当協会にとっては極めて縁の深い、当時厚生省の病院管理研究所主任だった、紀伊國先生をコーディネーターとして世界の病院、医療状況等を勉強させて頂いたことです。

加えて、県病院協会法人化の最初の大イベントとも言える、全日本病院管理学会を当協会が主催した年でもありました。

ご存知の方も少なくなったように思いますが、この学会を契機に当協会主導型で、日本病院協会と全日本病院協会が大同団結し、日本病院会を誕生させました。然し数週間でこれは失敗に終わり、即ち再び全日本病院協会が分かれてしまったのですが、一時的にはあったにしても歴史的な快挙であったことは間違いない事でした。

この学会で私は、学会のメインテーマであった「これからの病院はどうあるべきか」のパネルディスカッションの、民間中小病院の代表という形で、パネリストの1人に選ばれました。当日司会者の不手際というのか、各々のパネリストのエゴかは今となっては？だが、5人がスピーチするはずなのに、4人のパネリストが各人の持ち時間を2～3倍使ってしまったため、私の番になった時、スピーチに残された時間は、何と僅か1分と少し、あきれ返って思わず、このような自

分ばかりを主張する体質がある方がいる以上これからの病院の行末は暗い…私は時間を守らなければならない主催者側の代表なのでスピーチは止めます、と降壇したのを記憶している。何故か会場からの拍手が1番多かったのも不思議な気分であっていたように思い起こしています。

当時の日本経済は、初めてと云ってよい第一次石油ショックによる大不況が幕を開けた頃で、病院も軒並み赤字となり、言うなれば危急存亡の時でもありました。私共の病院も初の大赤字を経験しました。

そしてこの県病の法人設立の翌年、昭和49年に私は太田総合病院院長に就任したのであります。

そんな訳で県病の法人設立の時代は私にとっては忘れようにも忘れられない記念すべき年となっているのです。

さて、それから30年が過ぎようとしています。私が当協会に果たしてどんな貢献をしたのであろうか、などと色々と思い起こしてみると、やっぱりこれは土屋先生が初の県会長に就任し、その副会長の1人に選出された平成6年4月から4年間の平成10年3月までの仕事になるでしょう。当時、東海沖地域が大地震に見舞われると大騒ぎされており、国からして東海沖大地震の発生に備えて警戒宣言発令（神奈川県と静岡県の特例警戒宣言）を出す始末、私は県病の災害対策担当副会長に指名され、先ず病院の建物の耐震調査を実施しました。勿論県も一応の防災対策プランを作成したのですが、この調査が終わる前に思いもかけぬ、当県からは遠隔地の神戸方面にあの、想像をはるかに越えた大災害、阪神・淡路大震災が起こったのであります。

半年後、少し落ち着いた頃に、日本病院会も今まで眠っていた防災対策委員会の再編が実行され、第1回の委員会がこの年の6月に東京の日本病院会の会議室で開催されました。当時の日本病院会の諸橋先生が会長、そして担当副会長には大道先生が当たりました。但し不思議な事にご両人とも一度も委員会に顔を出されませんでした。

大地震に見舞われた地元の兵庫県病院協会長北村先生を委員長に、兵庫県から公私病院代表の3病院長、そして事もあろうに本来起こるべき筈だったという理由からか、東海地方を代表し神奈川県から私が、全国代表の委員として指名されたのです。もう1人は東京の武蔵野赤十字病院の建築関係に詳しい施設課長が選出され、計6名による委員会が発足しました。

それからが大変でした。「兎に角、百聞は一見に如かず」ということで、委員会は神戸にて開催することとなりました。2年間近い定例委員会に往復8時間半をかけて、とんぼ返りの神戸行きを14回こなした。交通費は新幹線の「こだま」料金を頂きましたが、時間がかかるので「ひかり」を利用、昼食と夕食は駅弁で済ませた。この委員会が中心となって1年目の平成8年7月には、東京の池袋サンシャインシティで開催されたホスピタルショウに併せて、この神戸・淡路大震災を教訓としての、全国の病院に対しての防災計画を啓蒙すべく、防災セミナーを開きました。

これと全く時を同じくして、神奈川県病院協会としても防災対策に本腰をいれ、担当副会長の私が委員長を兼務して取り組むことになりました。

先ず県内を各ブロック割し、それぞれの病院協会設立を私は強く訴えました。こうした大地震では兎に角、病院相互の連携を基盤としたシステム化が最も大切であり、この病院連携なくして防災システム化は構築出来ないというのはごくごく自然の発想でありました。今までは県下全てに協会組織は出来ておらず、この大地震の恐怖を目の当たりにしたことで、これが強い契機となり、防災対策委員会が発足した平成7年9月から年内中に、県下に続々と地域ごとの病院協会が誕生したのであります。

そして日本病院会の防災委員会と、県病の防災委員会は併行して活発に活動し、県内病院の各々の防災計画は勿論のこと、それぞれの地区と県全体の防災対策は急ピッチで進行し、平成9年には、当協会主催ともいえる全国防災セミナーを横浜で開催しました。全国からの参加者によって県医療会館の会場は溢れんばかりの大盛況で、地震に対する災害対策マニュアル作成に大きな成果を上げる事になったと確信しております。

これは県病法人設立25周年を翌年に控えての大仕事でありました。平成10年3月をもって私は副会長を退き、協会顧問という名誉ある役を頂き、平成10年～12年まで休養させていただいたのですが、そのためかどうかは分かりませんが平成11年1月に刊行された協会法人設立25周年記念特集号には、平成6年の病院耐震検査実施のみが掲載されているだけで、この4年間にも及んだ防災対策事業内容等が全く抹消されていたのには、この防災対策のために懸命に働いた防災委員や事務局の方々にとっても、そしてその中の1人として誠に情けない思いが致しました。

災害は忘れた頃にやってくる。近頃又全国的に各所で地震が頻発しております。改めて当県病院協会も地震への関心を高め、その対策の見直しを図る必要があるのではなかろうかと思っております。

県病院協会の更なる発展を祈り、法人設立30周年のお祝いの辞に代えます。
おめでとうございます。

法人設立30周年の感謝と期待



社団法人神奈川県病院協会

参与 益田 啓 作

法人設立以来参与をつとめ、30年になるとは感謝にたえない思いである。最近のこと又近未来のことについて述べてみたい。

25年から30年まで

この間に特筆すべきことは「事務長部会」が発足したことで事務長表彰制度が設けられたことである。前者は玉木義朗事務長部会代表幹事と役員らの努力によって着実に研修実績を挙げてきた。本年（平成15年）の医業経営セミナー（事務長部会研修会）でも250余名の参加者があった。事務長部会の存在と働きが県内の病院に十分にゆきわたっていることのあらわれである。後者については苦勞の多い職務でありながらそれに報いる顕彰の機会が少ないことに配慮された土屋章神奈川県病院協会会長が設けられた。しかも被表彰者の中から神奈川県保健衛生知事表彰の候補者を毎年推薦してゆくこととされた。小生は第1回の表彰式（平成11年3月10日）で表彰され、同年11月16日に保健衛生知事表彰の榮譽をうけた。この制度が設けられた時に都道府県で病院協会のあるところの事務長たちに尋ねてみると、「そんなものはない。神奈川県病院協会が羨ましい」との返事であった。

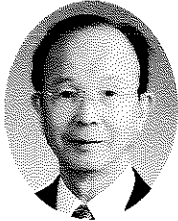
30年から35年へ

平成15年3月28日の閣議決定によると平成20年度までに医療保険制度の改革を実現してゆくこととある。ポイントとして保険者の再編・統合があげられ都道府県単位の地域型健保組合の設立が認められ、このため保険者・医療機関・地方公共団体が協議する場が設けられること、診療報酬体系についてはドクターフィー的要素とホスピタルフィー的要素の評価、患者の視点の重視等の基本的な考え方に

立って見直しが進められることが挙げられる。国から地方へ、医療保険制度、診療報酬体系の改革も都道府県単位として考える身近なものになってきたのである。ホスピタルフィーをどう算出するのか、人まかせではなく自分で考えねばならない。神奈川県病院協会の役割は実に重大なものになってゆかざるを得ないと思ふ。

以上

設立30周年に思う



社団法人神奈川県病院協会

参与 大友 定 雄

法人設立30周年おめでとうございます。

25周年特集で“スポーツの歩み”を記載したばかりでしたが、もう5年経過しました。

今年度はボーリング大会及び野球大会は無事終了しましたが、バレーボール大会、卓球大会及びゴルフ大会そして来年度のボーリング大会は第54回日本病院学会準備のため中止せざるを得ません。いつも練習に励んでいる皆さんに対して、お詫び申し上げます。

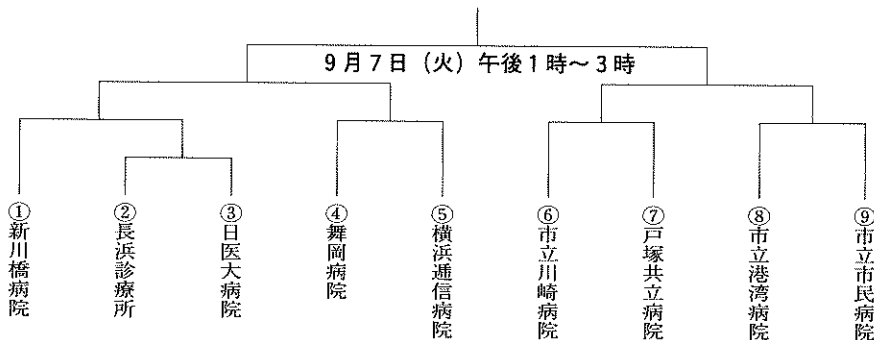
今回は最初の頃のスポーツはどんな要領で開催されたか協会に残っている資料から抜粋して記載する事といたしました。

• 野球大会

昭和40年第8回野球大会中央大会の組合せです。

予選の参加チームは不明。優勝、準優勝等の成績記録もありません。

第8回神奈川県病院協会優勝野球大会（昭和40年） 中央大会組合せ（保土ヶ谷硬式球場）



◎一位チーム、二位チーム、三位チーム
準優勝戦まで七回ゲーム。決勝戦は九回ゲームで試合を行います。

- 卓球大会

昭和41年4月10日（日）第8回卓球大会が三菱横浜造船体育館にて行われました。団体戦（男子）¥1,000（女子）¥700。個人戦は¥150の参加費でした。参加チーム及び人員は不明ですが、役員の数にびっくり、大会々長太田清一先生をはじめ参与の先生方36名、実行委員長小野肇先生、補佐2名、委員4名。世話人4病院云々となっております。盛大ですね。

- バレーボール大会

第4回バレーボール大会が昭和46年10月14日（日）やはり三菱横浜造船体育館にて行われました。参加費1チーム¥1,000、協賛金1口¥1,000となっております。

やはり参加チーム及び人員は不明です。

- ボーリング大会

第1回ボーリング大会は昭和47年3月12日（日）横浜フェアレーンズにて開催。参加費1人¥1,000。競技種目シングルス。方法はアメリカ式。会長太田清一先生、実行委員長高橋金次郎先生、参加75病院（310名）。続いて第2回大会は同じく昭和47年11月12日（日）横浜ニットウボウルにて行われました。参加43チーム（407名）。団体戦5人トータル。個人戦女子シニア3ゲームトータルとなっております。

熊田大会委員長が「とにかく設立10年になる神奈川県病院協会は漸く法人化されますが、今日まで協会としてはこの様な多数の参加した催しはなかった、云々」と挨拶されました。法人化される1年前の事でした。

- ゴルフ大会

昭和47年6月8日第1回ゴルフコンペが箱根にて催されましたが、生憎の台風で途中で中止。其の時は山田実先生（相模ヶ丘病院）が優勝致しました。仕切り直して続いて同年9月7日第2回ゴルフ大会が大相模カントリークラブで行われました。其の時は、太田正治先生が優勝致しました。参加賞には相模の梨一籠ずつ頂いたそうです。

以上が初期の頃のスポーツ大会でした。

最後に私事で申し訳ありませんが、故石田貞治氏のお声がかりで、昭和46年法人化準備委員会に始まって広報、年金基金、経営管理等のお手伝いをしてまいりましたが、現在の厚生福祉委員会が一番長い担当です。32年間漠然と過ぎましたが、これも一重に各病院の皆様のご協力によりここ迄勤めさせていただいた事に対し厚く御礼申し上げます。

法人設立30周年に思う



特定医療法人財団慈啓会

事務局長 青木 政雄

神奈川県病院協会加盟の大口病院事務部長として当時少しでもお役に立てるよう協会の幹事・事業委員を永い間努めて参りました。

ここで30年のタイムスリップをさせて当時の状況を思い起してみました。それは法人化の1年前、つまり昭和47年に厚生省病院管理研究所（現国立保健医療科学院）の指導を得て、病院管理者の専門的知識の修得の為の病院管理研修会が発足しました。官公庁・大学・関連病院等からの著名な講師を招聘し時宜を得た内容が好評で39名の出席者がありました。私もその中の1人で第1回生です。

今年で32回を数えている。その翌年愈々社団法人化した神奈川県病院協会の誕生です。

紆余曲折は屢々あったものの法人格のない単なる任意親睦団体では社会的信用度も低く相応な評価も得られないとの発起人の方々の主張と苦勞が徐々に多数の人達の賛同を得るに及び漸く実現に至りました。昭和31年設立から17年が経っています。これを機に医師会と表裏一体となって県・市の医療行政への協力・診療報酬改定要求・三基準の改善など精力的に活動し県内の関連団体から注目される大きな存在になって来ました。昭和49年第13回全日本病院管理学会を当病院協会が主宰し大きな成果を挙げ全国に神奈川県病院協会の存在を印象づけた一幕でした。次で昭和61年7月に第36回日本病院学会、更に平成16年には第54回学会を当県で担当することになり内外共に多忙で病院団体の発展に大いに寄与しています。然し乍ら病院団体は医療の質の研究向上と国民の健康維持を担って文字通り心身の痛みを癒している実績を持ちながら歴史的背景が薄いため知名度が低く中協等の公的諮問機関にも代表を送ることが出来ず長い間カヤの外で切齒扼腕していた。近年漸く4病協が結成され僅かではあるが1箇の椅子を確保することが

出来た。

財政主導で医療福祉がすべての面で抑圧されている中医協の現状を少しずつでも改革して頂きたいと願っています。最後に平成11年に神奈川県病院協会会長より、ただ長く居た丈の功績で事務長表彰を受けました。有難うございました。